

特集 地域支援で輝く！ 企業内診断士

第4章

「まちゼミ」の開催で 豊中を大阪No.1の街に

秦 博雅さん



梶川 拓哉

富山県中小企業診断協会

株式会社エッグレイの代表取締役社長、行政書士、見徳山安楽寺の副住職。多様な顔を持ちながら、さらに「meet-upとよなか」という任意団体の代表を務め、地域支援を行っているのが、秦博雅さんだ。

「人に会う、横のつながり」、「豊中を大阪No.1の街に」をモットーに掲げる団体の代表が考える、地域支援について話を伺った。



秦博雅さん（画像提供：秦博雅さん）

1. 現在の主な活動は中小企業診断士

(1) 多様な顔を持つ

秦さんが経営するエッグレイでは、コワーキングスペースの運営、ホームページ制作を手がけている。その一方で、お寺の副住職と行政書士の業務も行っている。

ちょうど新型コロナウイルス感染症が拡大した2020年に、秦さんは診断士登録を行った。コロナ禍で苦しむ事業者向けの公的支援、具

体的には地域金融機関や商工会議所などから依頼を受けた専門家として活動していたという。

一方で、日本初のお寺の境内にあるコワーキングスペース「Umidass」の運営や、副住職としてお盆の時期には檀家に訪問するなど、多様な仕事をこなしている。最近では、趣味のボクシングに加え、週末は2人の子どもを持つ父親としてレーシングカートを楽しんでおり、充実した毎日を送っている。

(2) 大きい会社より小さい会社

秦さんの診断士活動は、地元・豊中市内のケーキ屋や本屋、美容室など小規模事業者向けの支援が中心。

「経営者に直接会えるという意味で、大きな会社ではなく小規模事業者支援にやりがいを感じています」

前職は、一部上場企業の大規模ECサイトのビジネス設計やシステム設計などのコンサルティングを行っていたが、現在は異なる道を選択した。

「診断士資格を取得する人には大手企業在籍の方も多いと思いますが、必ずしも売上を10倍にしたいとか、上場したいと思っている事業者ばかりではありません」

2013年に個人事業主として独立した後は、いっそう小規模事業者の立場を理解し、寄り添いたいという気持ちが芽生えたと秦さんは話す。

2. 思い出した診断士資格

(1) 20年前の挑戦

秦さんは、先述した一部上場企業向けコンサルティング会社へ転職前の20歳代に一度、中小企業診断士にチャレンジしたことがあったが、その時は試験に合格できなかった。いったん中小企業診断士は断念し、転職活動に精を出した。

転職先のコンサルティング会社は京都市にあり、当時、秦さんを含め数名のスタートアップ企業であった。創業間もない企業ということもあって身を削って働いた。

「その当時は忙しく、3日に1回くらいしか家に帰らないほどでした」

ちなみに、その会社は現在、従業員数100名以上、売上高十数億円規模の中堅企業にまで成長した。

(2) 個人事業主として開業

大企業向けのコンサルティングはスケールが大きく楽しくもあったが、秦さんは「顔の見える人の支援がしたい」という気持ちから2013年に個人事業主として独立。2015年にコワーキングスペース運営、ホームページ作成支援のエッグレイを創業した。

「日本初のお寺の境内にあるコワーキングスペースには診断士試験の勉強をする方々もいて、もう一度、中小企業診断士の勉強を試みようかと思いました」

寺子屋を彷彿とさせるコワーキングスペースは、まさしく豊中市内に住む人向けの地域密着型施設。そのような地域に根差した施設で出会った、診断士受験生の姿を見て奮い立った。

一方で、副住職ならではの問題があった。中小企業診断士の1次試験とお盆の時期が重なり、受験できないのである。そこで、父である住職に頼み込んでお盆に休みをもらい、2019年に受験。約20年越しで見事に合格を勝ち取った。



「meet-upとよなか」の集まりの様子（画像提供：「meet-upとよなか」ホームページ）

3. 地域支援活動への参画

(1) 「meet-upとよなか」との出会い

40万人都市の豊中市には、「meet-upとよなか」という任意団体がある。豊中市内の商店主が中心となり2011年頃にスタートしたこの団体には、現在、約50の事業者が加盟している。エッグレイ創業と同年の2015年に秦さんもこの団体へ入会し、2021年には代表に就任。

「加盟する事業者さんがコロナ禍の影響を受け厳しい状況の中、『中小企業診断士が代表を務めることが良いのではないかな』という後押しを受け、代表に選出されました」

勉強会などの各種イベントは豊中市や商工会議所と連携することも多く、橋渡しとしての役割や信頼感が求められたのだ。

(2) 魅力は「横のつながりができること」

「meet-upとよなか」のホームページを一度見てほしい。「豊中を大阪No.1の街に」という言葉とともにYouTubeがアップされている。「豊中市のお店に行ってみよう」という声や「何だか楽しそう」といった声が聞けそうな愉快な様子が伝わってくる。

「稼ぎたいという気持ちだけでなく、豊中市を良くしよう、地域を良くしようという団体の大義名分があることが事業者同士の横のつながりを強くするのだと思います」

横のつながりが強くなることで何か困っていることがある顧客には、団体加盟の顔見知りの事業者を紹介することも多々あるという。



「まちゼミ」のチラシ（画像提供：「meet-upとよなか」ホームページ）

(3) 毎年実施される「まちゼミ」

「meet-upとよなか」の柱となるイベントは年に一度、秋口に開催される「まちゼミ」である。「豊中のお店によるワークショップの祭典」と題したこのイベントは約1ヵ月にわたり開催され、今年で14回目を迎える。

この期間中は団体に加盟するお店の人が講師になり専門的な知識や技を無料で提供したり、店に顧客を招いて体験型ワークショップを実施したりする。

具体的には、ケーキ屋の「親子で楽しいバター作り」、ネイルサロン店の「1dayセルフネイル体験」とイメージしやすいものから、助産院の「乳幼児からの性教育」、税理士法人の「相続・税金対策」など幅広い。ちなみに昨年、開催された「第13回まちゼミ」で秦さんは、コワーキングスペース「Umidass」にて「起業に必要なお金の知識」と題した無料のセミナーを開催した。

「まちゼミ」自体は、豊中市独自のものではなく、全国約165ヵ所で開催されている。

「店主がお客様にプロの技を伝えることを通じて信頼を得るイベントです。たとえば、店主がおいしい魚のさばき方を教えるとします。さばき方を教えてもらったことで、またあの店で魚を買おうと思ってもらえるのではないか、といった発想です」

この「まちゼミ」は商店街で開催されてい

ることが多く、豊中市のように市内全域で開催されていることは少ない。それは、以前の運営母体が豊中市であったことに起因するが、予算などの関係から打ち切れそうになったことがある。

しかし、「それではもったいない」という事業者の声が多数寄せられ、民間で運営するようになったのが「meet-upとよなか」発足のきっかけで、現在では毎年の恒例行事となっている。

秦さんが代表に就任する前は、毎年、夏に開催されていたが、「夏休みで時間が取れないという声や、年末年始は繁忙期で忙しい」という事業者の声を汲み取り、1年の集大成として秋開催に変更した。

(4) 運営にあたっての苦労

「まちゼミ」を中心に「meet-upとよなか」の活動は、豊中市内全域に広がっている。

「『meet-upとよなか』の活動は、豊中市や商工会議所が協力してくれるのも、ありがたいことの1つです」

たとえば、「まちゼミ」の開催が近づくとチラシが市内の図書館など公共施設にも貼り出される。チラシを目にする機会が増えるだけでなく、安心感も生まれるという。

しかし、あくまでも任意のボランティア団体であり、苦労もある。

「事業者全員の意思統一が難しいですし、損得勘定を持ち出されると運営自体が困難になることもあります」

大義名分があるからこそ、横のつながりができ、強力なものになる一方で、加盟する事業者数は50近くになり、代表として全体をまとめる難しさを感じることもあるという。また、豊中市は人口も40万人近く、北、南、東と中心地が3つに分かれていることも、一体感の醸成を難しくさせている。加えて、コロナ禍で加盟する事業者数が減る問題もあった。

「コロナ禍前は、加盟する事業者数は70近くに上りましたが、コロナ禍を境に加盟店は減少しました。交流会を開催しても参加する事業者の戻りが鈍い印象です」

豊中市を良くしたいという思いを持つ事業者が多いほうが良いことは明らか。そのためには加盟店を増やすだけでなく、維持させる工夫も必要なのだ。

豊中市は大阪一の繁華街である梅田まで10分程度で行ける便利な街。だからこそ、豊中市民には、梅田で買い物せずとも豊中市内で買い物をしてほしいと願う。

「梅田もすぐに行けますが、地域事業者のほうはその土地の事情をよく理解していたり、実は値段が安かったりします」

地域で消費を回していくことが理想と秦さんは話す。

4. 地域支援のこれから

(1) 「地域の課題は、地域で解決」

豊中市には、商工会議所と連携して運営する「とよなか起業・チャレンジセンター」がある。そこでは、地域の事業者を支援するためにセミナーや交流会が開催されている。

「地域の課題は地域で解決する、この取組みに私も賛同してセミナーにも協力しました」

取組みの背景には、豊中市を起業の街にしたいという理念も存在するという。さらに秦さんは、「北摂診断士の会」という中小企業診断士が集まる地域独自の会にも加入している。



「meet-upとよなか」総会の様子（画像提供：秦博雅さん）

(2) 一生、継続できたらよい

改めて、「meet-upとよなか」をどうしていきたいか、秦さんに尋ねた。

「私は、経営者としての10年でさまざまな人と出会いました。会社を大きく成長させている人もいれば、破産した人もいます。経営者として目指すところとして、『一生、継続できることが大切』と考えています。この地域支援も一緒ですと続いて、途中で頓挫しないことが大切だと思います」

そして、秦さんは地域支援事業を考えている方に向けてこう語る。

「地域の中小企業診断士で集まり、皆で考えたらよいと思います。人が集まれば、きっと何か生まれると思います」

秦 博雅

(はた ひろまさ)

2020年中小企業診断士登録。現在、株式会社エググレイの代表取締役、見徳山安楽寺の副住職、行政書士としても活動中。



梶川 拓哉

(かじかわ たくや)

大学卒業後、地方金融機関に勤務。2021年中小企業診断士登録。

